

1. はじめに

今回の実務実習において、以下のことを意識して臨みました。

- ・将来の就職先を考える上で、病院薬剤師と薬局薬剤師の業務の違いを学ぶ。
- ・病院内での薬剤師と他の医療従事者との関わり方を学ぶ。
- ・入院患者への薬剤師の関わり方を学ぶ。
- ・医薬品や疾患についての知識を広げる。

2. 実務実習において経験した事柄をどう活かすか

実務実習は、唯一学生のうちに実際に現場で働いている薬剤師と同じような業務を経験できる、とても重要で貴重な期間だと思います。前期で薬局実習を経験して病院実習に臨んだので、薬局薬剤師と病院薬剤師の業務内容の違いを、身をもって体験することができました。よく違いとして、病院薬剤師はカルテを見ることができるので、患者さんの経過や検査値を把握することができる、ということを目にしていたのですが、その他に、添付文書に沿わない用法・用量で治療を行う際の指示が記載されていたり、難聴がある、左目が見えない、といった身体的な注意事項が記載されていたことも、とても有用だと感じました。高齢でなくても難聴のある患者さんには声の音量を上げて説明したり、左目が見えない患者さんに服薬指導を行う際には患者さんの右側から薬の情報提供書を提示するなど、事前に把握しておくことでできる気遣いがあると思いました。実際に、検査値を見て処方に疑義が生じたことがあり、その時は薬剤師の先生に疑義照会を行っていただいたのですが、結果として処方変更となりました。検査値をもとに処方監査をすることができるメリットを実感し、特に腎機能に問題がないか確認するよう心がけるようになりました。

初回面談や服薬指導で癌の患者さんに接したことが、11週の実習のなかで特に印象的でした。病棟での実習を行う前に薬剤師の先生から、「医療者側と患者側で癌の治療に対する認識の違いがある場合があるんだよ。医療者は癌組織が大きくならないことも治療の効果があると評価するけれど、患者さんは治療をすれば完治すると考えていることもあるから、そのギャップを埋めるのは難しい。」という話を聞き、そのことが一番印象に残っています。癌の種類や進行度によって切除や化学療法で寛解にできるもの、進行を食い止めることが治療目標となるものもあるということだったので、医薬品に関する知識だけでなく、疾患に関する知識の必要さを感じました。また、末期癌の告知を受けていない患者さんに服薬指導をする機会がありました。服薬指導にあたって電子カルテで患者情報を確認していると、ご家族の希望で告知の日程調整をしているということがわかり、末期癌であることを知らされる患者さんの気持ちや、告知することを決断したご家族の気持ちを考えるとつらい気持ちになりました。しかし、患者さんにとっての最善とは患者さん本人が決めることであって、医療者は自分の感情を介入するのではなく、必要なことは患者さんの考える最善に寄り添

うことだと感じました。

実習中に医師と直接話をする機会はありませんでしたが、医学部生との合同症例検討会で医学部生と意見交換をすることができ、模擬ではありましたがチーム医療への参画を体験でき、貴重な経験となりました。薬学部生は医薬品に関する意見を求められる場面が多く、医療者への情報提供を体験し、患者さんへの情報提供とはまた違った部分も学ぶことができました。

3. 実習を終えて

今回の実習を通して、薬剤師の存在意義、薬剤師としての考え方を学ぶことができました。また、医療用語を用いずに患者さんにわかりやすく説明するために、自分が正しく理解していることの重要性を学び、わからないことは自分で納得できるまで調べ、わかりやすい言葉に言い換える習慣ができました。

最後になりますが、実習の受け入れをしていただきありがとうございました。実習中に機能評価もあり、実習前に想像していたより病院薬剤師の業務にはたくさんの業務があることを知り、学ぶことができました。先生方にご指導いただいた内容や薬剤師としての心がけを忘れず、実習を通してイメージした自分の目標とする薬剤師像に近づけるように頑張っていきます。ありがとうございました。